

「にがぁ～い黄檗はミカン色」

富士見の景観



熟したキハダの実

大平区の中ほど、三井さんのお宅の車庫の前に、大きなキハダの木がある。目通り270cm。高さは20mほど。この木は、諏訪地方では3番目に大きいキハダの木であると記録されている。幹は地上3m位のところまで二つに分かれ、太い方はさらに枝分かれしている。樹齢はどのくらいであろうか。幹の表面はコルク質の表皮が深く縦に裂けている。

鳥や動物によって種子分散される。この木は雌株であるので、緑色の果実が付き、葉が落ちる頃には黒く熟して、辺りはキハダの独特な香りがするのだという。

三井さんは、大切な庭木が「諏訪の巨樹・大木」でもあることから、樹木医に聞きながら根周りを守っている。昔、雷に打たれたこともあって、伸びた枝の剪定は欠かせない。切られた枝は無駄にすることなく、煎じて飲んでいたようだ。(小さい頃は、飲まされていたのかな?)

諏訪市の高島城にもキハダの巨木がある。やはり城内で薬用に使われたのであろうか…。太い幹には切り取った跡があった。

問 富士見町役場 建設課 都市計画管理係

026-29216

キハダ【黄檗、黄膚、黄柏 学名Phellodendron amurense】ミカン科キハダ属の落葉高木。雌雄異株。アジア東部の山地に自生していて、日本全土でもみることができます。葉は対生葉序(たいせいようじょ)で奇数羽状複葉(きすうじょうふくよう)。5月末～7月初旬にかけて、円錐花序の小さい黄色い花が見られるようになります。樹皮はコルク質で、外樹皮は灰色、内樹皮は鮮黄色です。この樹皮からコルク質を取り除いて乾燥させると薬用名の「黄檗(おうばく)」となります。黄檗にはベルベリンを始めとする薬用成分が含まれ、強い抗菌作用を持つといわれており、チフス・コレラ・赤痢などの病原菌に対して効能があるようです。主に健胃整腸剤として用いられ、「奈良の陀羅尼助(だらにすけ)」「信州木曾の百草(ひゃくそう)」「鳥取の練熊(ねりぐま)」などの薬に配合されているようです。このほか染料の材料としても用いられ、鮮やかな黄色に染めるために使われたり、赤や緑色の下染めにも使われています。防虫作用があることから、写経をする紙を染めることもあるようです。またアイヌでは、黄色を尊び信仰に関わるもののみをキハダで染めていたとも言われています。キハダの実は秋には黒く熟します。「それを5～6個の実を口にし、軽かむ。そしてすぐ吐き出す。「甘味」が残る。「甘いミカンの味がする!」を試した方がいたようですが…。生物との関わりのなかで、アゲハチョウ、ミヤマカラスアゲハ、カラスアゲハ、ルリシジミ等の幼虫の食樹となっていますので、夏の頃には、辺りで美しく成長した蝶の姿を見かけることもあるでしょう。

- ◆町の人口と世帯数 平成24年2月1日現在(前月比)
住民基本台帳人口 男性/7,538人(-7) 女性/7,747人(-5) 合計/15,285人(-12) 世帯/5,717世帯(-6)
- ◆発行日 平成24年3月1日
- ◆編集・発行 富士見町役場 総務課 〒399-0292 長野県諏訪郡富士見町落合10,777 TEL0266-62-2250(代) FAX0266-62-4481
- ◆ホームページ <http://www.town.fujimi.nagano.jp> Eメール fujimi@town.fujimi.nagano.jp ◆印刷 (有)富士見印刷